

人間性回復の総合科学的接近の研究開発

～環境科学と健康科学を同じ土俵で学習する見る目・語る目・動かす目～

丸地信弘・仲間秀典・魏 寧・張 兵

李 桃・A.Fattah・張振喜

信大医学部公衆衛生

R&D on Holistic Approach with particular to the Recovery of Humanity in Science

～KAP on Health and Environment based on so-called TAUCO Viewpoint～

Nobuhiro MARUCHI, MD, Hidenori NAKAMA, MD, Ning WEI, BE, Bing ZHANG, MD,

Tao LEE, MD, Abdul FATTAH, MD and Zhen Xi ZHANG, BE,

Department of Public Health, Shinshu University School of Medicine, Japan. 390

Synopsis : The current human systems problems could be only solved through an unified effort of hypothetical approaches including existent views. It has been observed through our continuous health research that we should adjust with our way of approaches for common problem solvings according to the changing needs.

In order to understand the trinity nature on human ecology as methodology, human biology as results and human technology as discussion, Two-in-One nature on human centeredness for living together and humanization practice on bioethics, QOL, and Quality Assurance (QA) was studied from the viewpoint of so-called TAUCB concept being the essential nature on human philosophy.

Especially, our recent development on so-called "trinity approach under coupling organ (TAUCO) concept" for total problem solvings has been remarkably proved to contribute the development of present paper from the viewpoint of human centered study.

要旨 : 住民主体の組織活動は①補完体による三位一体という前提（人間主体パラダイム）に立って、②組織活動の社会原則を生かした生命倫理的方法により、③生活の質的な実践原理を視覚的に構造化する。それを受けて、④質の評価的な「社会経済理論」を提案し、⑤この疫学的接近による事例評価の計画・実施・評価の理論体系をモデル化し、主体の生涯研修（自己反省）と客体の効果判定を補完的に行う総合評価の実施方法を提案する。

Key words : TAUCO (trinity approach under coupling organ) Concept, Living Together, Socio-economic Study Theory, Human Centered Paradigm. Unity in Diversity, Supportive Environments, Social Systems/Principles,

補完体制の三位一体, 共に生きる, 社会経済研究理論, 人間主体パラダイム, 多様性を受容した総合科学体系, 支援環境, 社会体制, 社会原則

「全体の中に部分があり、部分の中に全体の本质がある」 科学哲学者 A.ケストラー¹⁾

緒 言

近年、国際情勢が「共生」の思想に象徴される事態を迎え、「住民参加の地域ケア/環境保全」も社会の生存と繁栄の共通基盤だと人々に知れ渡り、それはエ

イズ等の保健・医療・福祉活動の地域ケアでも同様なことは確かである²⁾。

そのため、環境保全をはじめエイズ・在宅老人・精神保健・MRSA など<住民/病者と共に生きる>精神による保健の教育・実践・研究が必要になり始めて

表-1 著者等の最近における人間主体の組織研究開発に関する自分史

主題	時期	主な関連事項
① 共生の地域ケア	1994年4月	住民参加の地域ケア、共生の活動理念
② 相互補完的接近	7月	ブライトンにおけるHCS会議に出席
③ 三位一体の認識	10月	HCSワークショップでの発表と討論
④ 人間主体の姿勢	12月	人間主体の四原則、保健開発の四原則
⑤ 本稿の原稿作成	1995年1月	補完体による三位一体と有機体の発想

いる。特に、高齢化社会を迎え、近年中に厚生省が施行計画の「地域保健法」ではく住民参加の地域ケア>の展開が基本姿勢になるので、その学問的開発の現場要請も益々と高まっている。

ところが、この社会的に当たり前の話題への今日の学問的姿勢は主客分離の専門家指向の分析科学的発想が根底にあるため、社会現場と教育・研究現場との遊離が起きており、「住民参加の組織活動」という人々の願いも形骸化しやすい危険な状態を胎んでいる。

長年、われわれは地域ケアに関わる計画・実施・評価に携わってきた経験から、在来の専門家指向の「予防医学」「保健活動」それに「疫学接近」の発想に疑問を抱いており、それらを上記の人間主体の地域ケアの精神を生かして軌道修正する努力をおこないたい。

なお、本稿は上記の学問的願いに関する研究開発であり、論述形態は学術論文の基本を尊重して、住民参加の地域ケアや環境保全の組織活動を素材とする事例研究に必要な理論と方法を提案することを本稿の課題とすることを念頭に入れていた³⁾。

背 景

本稿の基礎理解として、著者等の主題研究経緯に関する背景が有効であろう。すなわち、表1は著者等の最近一年間の人間主体の教育・実践・研究に関わった主な経過であり<人間主体の組織研究開発の自分史>と言え、人間主体体制(HCS)に関するブライトン会議への出席やHCSワークショップ³⁾での発表などその指向性が特に明確になっている。なお、著者等の本稿に関する話し合いは繰り返して行い、現在の原稿を纏めた。但し、その前段階としてOxford Textbook of Public Healthの分担執筆や上記の人間主体システム会議(HCS)で発表した内容の刊行に向けた類似の話し合いの経験と成果も生きている。

目 的

本稿は地域活動を素材にして、生命倫理・生活の質・質の評価の三位一体の計画、実施、評価を体系的に行なうため、住民主体の組織活動の精神を生かした問題解決の理論と方法を多様性を取り入れた総合科学体系として研究開発することが目的である。

そのため、住民参加の組織活動の学習理論と評価方法を提案し、<共生>の時代の「健康文化」を見通す討論を行なう。具体的には組織活動の①前提となる学問原則に基づく②実践認識を仮説とする③住民主体の社会経済理論を体系化して事例評価方法を提案し、二十一世紀的要請の高い「人間主体パラダイム」の構造と機能をのべる。

方法（教育と実践と研究を見る目）

1. 人間主体活動の学問的原理：主体・材料・道具の三位一体（図-1）

人々が日常おこなっている主体的活動を端的に表わすのは図1のイラストであろう。この粉挽きは主体と道具と材料の三者構成であるが、材料を忘れて主体と客体という対置した構造的捉えになりやすい。しかし、ここで同時に考えたいことは粉挽きの出来上がりを見



図-1 粉挽きの図から人間主体活動の原理を捉える

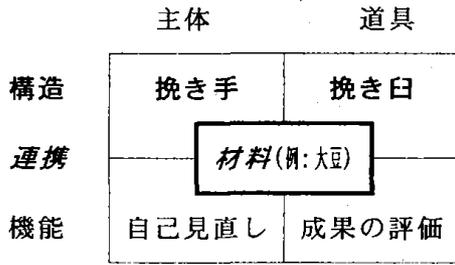


図-2a 粉挽き図の構造と機能の全体像

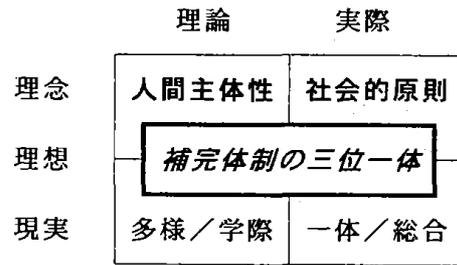


図-2b 補完体制の三位一体化の基本構成

表-2 人間主体の社会活動の実践原則(社会原則)

学 習 ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓	1) 人間主体の原則	共生	開発	連携	自省	(1994)	↑
	2) 生命倫理の原則	益性	無害性	自律尊重	公正	(1978)	↑
	3) 組織開発の原則	補完体*	目標	組織	集団	(1994)	↑
	4) 組織活動の原則	住民参加	要請指向	資源活用	協調統合	(1978)	↑
	5) 組織研究の原則	予防コホート研究	伝達コホート研究	事例対照研究	既存統計研究	(1987)	研究

直す機能的な捉えである。そのため、本稿では主体間の支援環境が重要になり、図-1は教育・実践・研究に共通するイメージを表している。

2. 人間主体活動の学問的法則性：補完体制による三位一体(図-2)

そこで、著者等は最近における地域ケアに関する幾つかの研究活動の経験から、人間主体活動に共通する学問的法則とでもいえる「補完体制による三位一体」という概念を提案したい。その際、2x2の枠組を併用すると検討課題の意識構造を関係者と共有しやすくなり、前記の内容は図-2aのよう表わすことができる。

なお、この人間活動法則の有する一般特性を要領よく表わすと図-2bのようになろう。すなわち、社会的に人々が共に生きるためには「人間主体性」が前

提であり、それには幾つかの「社会原則」が必要になり、それにより多様性を尊重しながら学際的な総合問題解決の理論と方法を研究開発できるだろう。ここで、

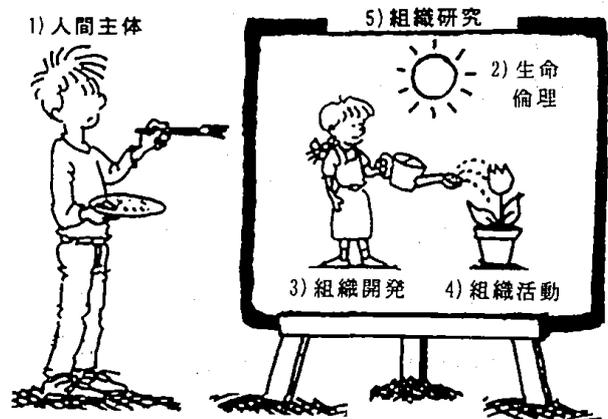


図-3 人間主体の社会活動の実践原理

表-3 有機体の三段階接近に関わる用語理解

有機体	補完体	主体	媒体	客体	備考
教育/計画	粉挽き	個人	媒体	道具	補完体制による三位一体の社会法則
実践/実施	絵描き	画家	額縁	絵画	生命倫理・生活の質・質の評価の三位一体の捉えを社会常識として活用
研究/評価	粉挽き	理念	理論	方法	組織活動の評価の理論と方法の開発

図-2bを理論的に説明する人間主体の社会原則が次の表-2の説明であり、これは広義の環境科学の共通基盤ともいえるだろう。

3. 人間主体の社会活動の原則と原理 (表-2) (図-3) (表-3)

ここで用いる五つの原則は、本稿主題に関して著者等が試行錯誤の末に活用する内容である。ただし、ここで生命倫理⁴⁾や組織活動⁵⁾の原則は既存の提案を活用しているが、組織研究の原則は予防疫学⁶⁾とも呼んでおり、既存の疫学研究の考えを一部で読み替えて活用している。そして、特に人間主体と組織開発の原則は昨年に著者等が独自に開発した概念である。なお、この社会原則は人間主体の法則を前提として他の四つの社会活動原則で成立する構成とみなしたい。

人間には全体像に関するある種の共通感覚が人種・性別・年齢等を越えて存在するようだ。特に、共生の科学では様々な人の参加が前提であり、科学と技術に人間性を取り戻すため、図-3のような生命倫理的な比喩を生かすことが相互理解を深めるのに有効である。なお、この図は補完体制による三位一体を端的に表わしたものと見え、人間主体と組織活動(政策・開発・実践)の補完的な三位一体、組織活動と組織研究の相補関係を表わしており、この段階では画面の三つの原則に注目した教育研修に注目する。しかし、この段階では額縁への関心は希薄だが、図-3の全体像は下記の有機体に相当するだろう。

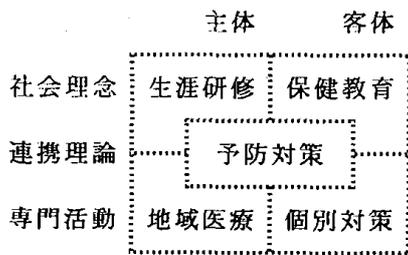


図-4 事例のエイズ予防対策の枠組

すなわち、人間主体の組織活動に関する教育・実践・研究を系統的に理解する場合、その教育と研究の関係は前記の図-1で上手に表せるが、この両者の間に位置付く実践は媒体として支援環境²⁾を形成するので、この理解には図-3の説明が有効になるだろう。

それゆえ、人間主体の社会活動の総称として「有機体」を用意すると、前記の図-1・3に関する教育/計画、実践/実施、研究/評価は表-3の要素構成と理解すると便利である。なお、これらの各段階の四項目の組合せは表-2の原則の配置と基本的に似ている。

4. 検討事例のエイズ予防対策の学習理論と事例研究の枠組 (図-4・5)

本稿で著者等は「エイズ予防対策」^{6),14),15),16)}を素材に人間主体の教育・実践・研究に関する学問的検討を行うが、その前提として予防対策の実践内容を図-4のよう認識する必要がある。

すなわち、住民主体の予防対策には、先ず生涯研修に基づいた保健教育を理想的に理解することである。その上で地域医療の観点から個別対策を臨床的に検討することである。なお、この発想は従来の客観性を重視した姿勢と入り方が逆といえるだろう。

その点、本稿は前記図-2のa・bと上記の図-4を踏まえて、エイズ予防対策活動の事例研究の理論と実際を検討するものであり、その枠組は図-5のようになり、この捉えは多様化した事柄を問題解決に向け

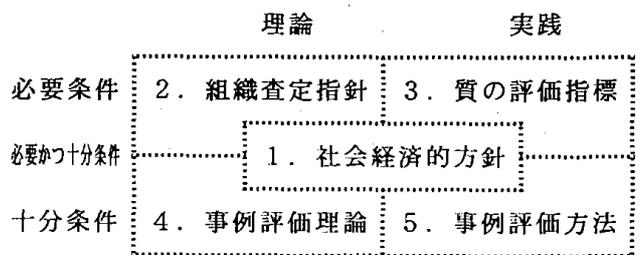


図-5 事例研究(成績)の五段階の枠組

表-4 本稿検討の媒体構成

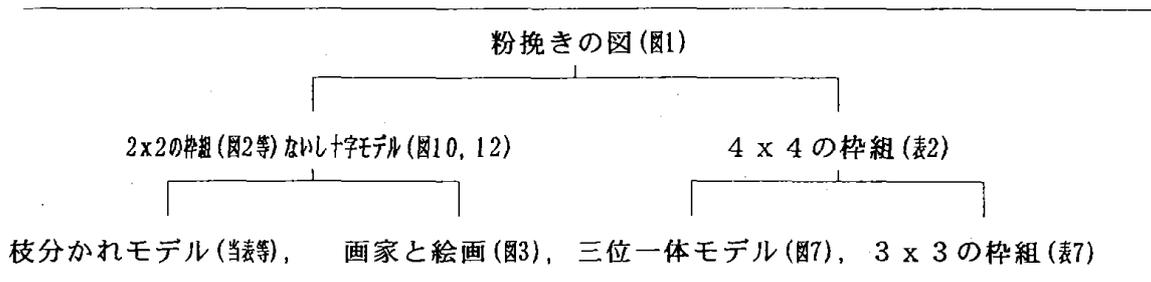
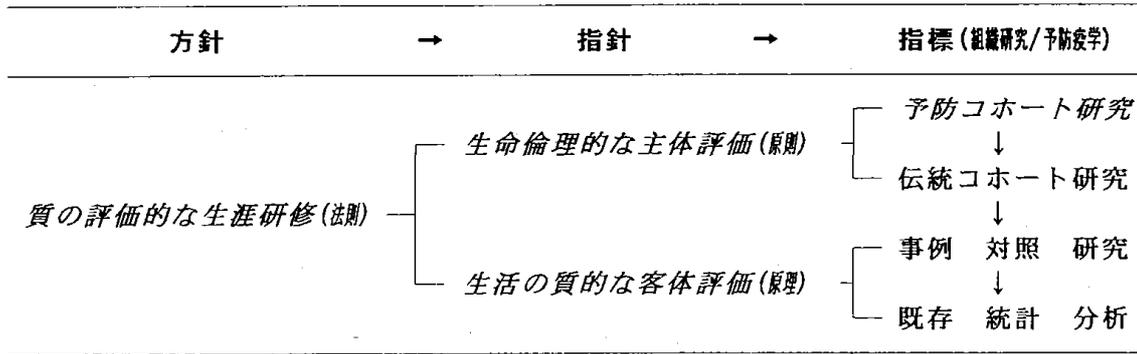


表 - 5 社会経済的な質の評価の方針（前提条件）



て一体化する姿勢であり、前記の基本姿勢も確認できる。

5. 人間主体の社会体制の検討に用いる媒体 (表-4)

学問媒体としてのモデル (表, 図, イラスト) は前記の図-1の大豆と同じ存在で、この研究では媒体ないしインター・フェイスと捉えるのが特徴であり、その活用は表-4の通りである。なお、討論ではその他にメビウスの環、ヤーヌス、マンダラなども合わせて活用する。

成績 (組織活動の事例研究を語る目)

ここでは本稿方法を受け、事例研究の理論と方法の研究開発に関する成績を述べよう。

1. 社会経済的な質の評価方針 (前提条件) (表-5)

上記の方法で人間主体の組織活動の法則を前提に、それに関わる原則 (生命倫理) と原理 (生活の質) を理解したので、ここではそれらを指針 (媒体) にして、社会経済的な質の評価に必要な基本方針と実践指標を構造化したい。

前者は質の評価的な生涯研修を念頭に置くことであり、後者は「組織研究の原則」すなわち予防疫学^{2),6)} という概念を用いることであり、全体としては表-2の生命倫理・生活の質・質の評価の三位一体と組織研究の一体化に関する捉えとなる。

2. 人間主体的な組織活動の査定指針 (必要条件) (図-6)

住民主体の組織活動の基本は前記の表-2に表している「組織活動の原則」である。この原則を取り上げる理由は、上記の社会経済理論で「組織研究の原則」の基礎理解として、この原則が検討事例で満足することが必要条件だからである。

この原則は国際的にPHC (プライマリ・ヘルスケア) が叫ばれたとき、当時のWHOヨーロッパ地域

事務局長のカプリオ⁵⁾ が提唱したが、当時われわれが国内的に紹介したとき現場関係者から相当に注目され、組織活動の査定指標として保健医療分野でも利用されはじめた。

換言すると、住民参加の組織活動の事例研究でこの組織活動の原則を満足すれば、社会経済理論を活用した組織活動の効果判定 (仮説検証) が可能になるのである。

なお、上記の組織活動を疫学の専門用語では「介入研究」と呼んでいるので、前記の組織研究の原則の中では「予防コホート研究」と呼んでおり、それにより、在来の疫学研究の知識を住民参加の地域ケアの事例研究にも生かすことが可能になった。

3. 社会経済的な質の評価の指標 (十分条件) (表-6)

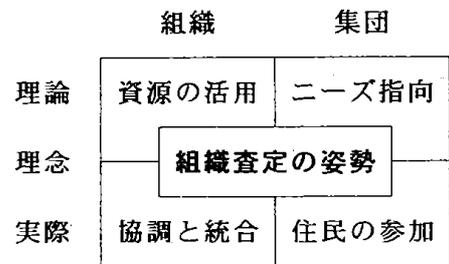
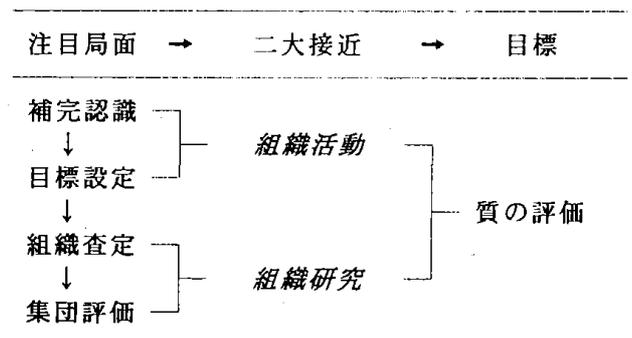


図-6 組織活動の査定指針 (十分条件)

表-6 社会経済的な質の評価の指標



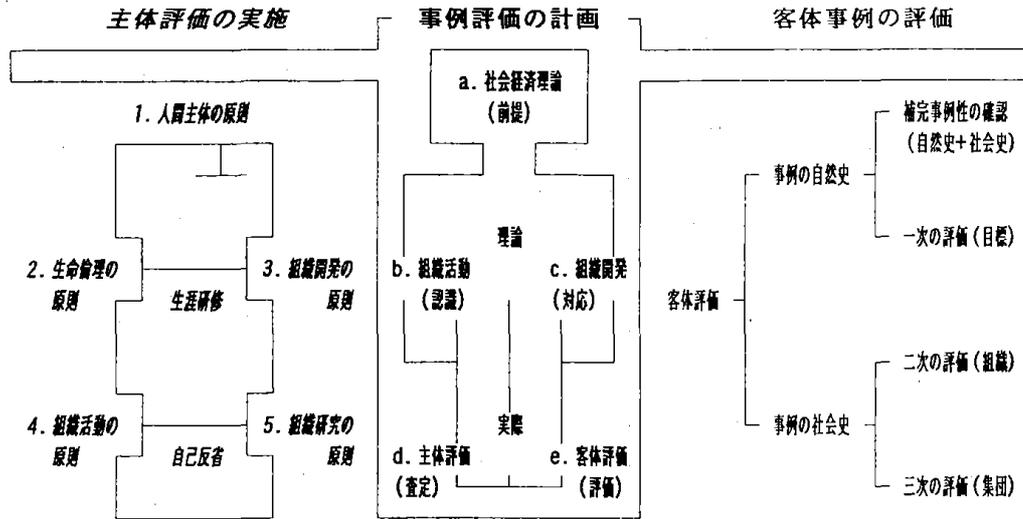


図 - 7 社会経済的な事例評価の理論体系

6)

この表 - 6 は上記の組織研究・組織活動の原則を前提（媒体）にして、質の評価に向けて組織開発の原則を組み合わせて、社会経済的な効果判定に生かす十分条件といえる。

われわれが組織開発の原則に気付いたのは1994年末のことである。しかし、ここでは表 - 6 は社会経済理論を実際に活用する水先案内人の役割と理解した方がよい。

ここで、成績1と成績3の両者は補完関係をなすことを銘記する必要がある。この捉えは当然とはいえ分析的発想では忘れやすいことを指摘しておきたい。

4. 社会経済的な事例評価の理論体系（理論仮説）

（図 - 7）

本研究は「生命倫理」的発想に基づいて住民参加の地域ケア活動を「生活の質」の面から捉え直し、それを上記の「質の評価」の観点で総合評価するというのが基礎理解である。従って、われわれは事例評価の計画・実施・評価も三位一体に表し、主体評価と客体評価が補完性を持つという基礎理解（補完体による三位一体）を構造化することだろう。

そこで、本稿を上記の観点に基づいて試行錯誤して検討した結果、事例評価の体系を図 - 7 のよう表現できたが、この三位一体モデルは総合連携接近の基本モデルの一つであり、この図 - 7 は「補完体制の三位一体」を端的に表し、この計画・実施・評価は、運転手が自動車で目的地に向かう経過と成果を事例評価するという生活感覚的な説明が分かりやすい。

A. 社会経済的な事例評価の基本姿勢

真ん中の人間モデルの内容は前記の検討から得られる事例評価に関する基本姿勢を表している。すなわち、ここでは表 - 2 を下から上に向けて用いるので、この意識化は発想の転換を意味し、それが共生の時代の地域ケアの事例評価（仮説検証）の理論である。

換言すると、この理論学習（素材学習）は本稿方法を修得することが目標だが、成績の質の評価では、①組織研究の原則が総合評価の方針、②組織活動の原則が組織活動の査定指針、③組織開発の原則が事例評価の実践指標となり、これで仮説検証（効果判定）を主体と客体について補完的に行うのである。

B. 主体評価（生涯研修、自己反省）

注目事例の組織活動、組織研究に係わった主体の生

表 - 7 社会経済的な事例評価の実施体系（作業仮説）

	一次の評価	二次の評価	三次の評価
理念	生命倫理 (BE)	生活の質 (QOL)	質の評価 (QA)
理論	注目事項の自然史*	組織対策の社会史**	予防疫学の三段活用
実際	関係者の自己反省(査)	組織対策活動の査定	対象集団の効果判定

涯研修と自己反省の段階である。すなわち、人間主体のエイズ予防対策の認識・実践・評価は全て人々が係わるから、その枠組と順序は図-7の左側に記した判断根拠に従って表-2の五原則を活用する。

この主体評価は、①一組織研究の原則を核に組織活動・組織開発の原則を三位一体に活用する「社会経済理論」が前提となり、②生命倫理・人間主体・組織開発の原則に照らし社会的なく生涯研修/学習>を行い、③続いて研究的なく自己反省/査定>を組織活動・組織研究の原則に照らして行うが、④実際には下記の客体評価の<効果判定>を前提に両者は成立している。そして、⑤これら三者は「仮説検証」の形態をとることを銘記したい。

C. 客体評価（効果判定）

図-7の右側は客体評価の枠組として要約した内容である。具体的には<事例の自然史と社会史とからなる補完体>に注目することが前提となり、前記の一次・二次・三次の評価を三位一体に仮説検証する。図-7右側で注目事例の自然史(*, 2)と社会史(**, 2)をあげているが、この客体評価では時空一体を表す「二相性モデル」を用いて、両者の補完関係を感覚的に表すため自然史をcis形、社会史をtrans形と呼ぶが、その詳細はここでは割愛する。

5. 社会経済的な事例評価の実施体系（作業仮説）
（表-7）

これは上の図-7に基づく右側を具体化した内容で、事例評価の仮説検証に用いる実施体系である。この枠組で事例評価が可能になるので、事例研究の要約と理解してもよい。

討論（社会常識を動かす目）

ここでは有機体という概念導入で学問的普遍性が生まれる理由を討論することにする。

1. 人間主体の事例研究に関わる主要事項（図-8）
（図-9）（表-8）

本稿でいう社会的法則の実践活用に共通感覚の原則や原理を主体・客体的に体系化して理解することが、人間主体の組織活動の事例研究のために有効であろう。

そこで、図-8の図式を考案した。本稿の基本的な認識に沿って2x2の枠組を前提として配置する。本稿方法で、われわれは四つの2x2の枠組をペアにして説明している。

前者は「補完体制における三位一体」の主体的理解に関わる原理と原則を説明しており、上側に示した。それを受け、後者は事例研究に関する理論枠組と研究方法を下側に示した。これで素材が変わっても事例研

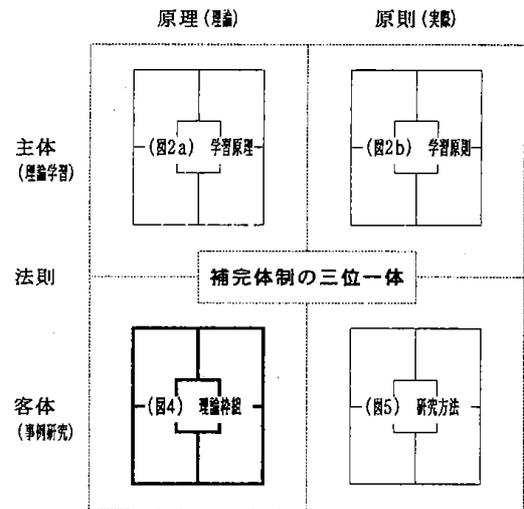


図-8 人間主体の事例研究に関わる主要事項の関係

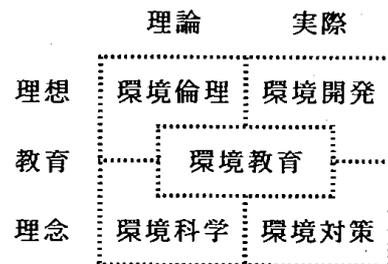
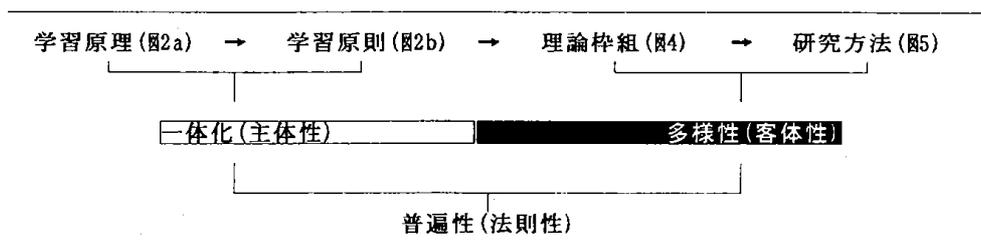
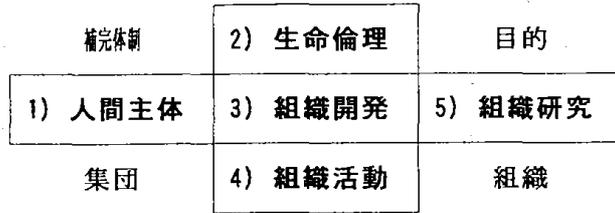


図-9 環境保全に関わる理論枠組

表-8 多様性を生かした補完体制による三位一体の社会体制



主体接近：学習原理(計)→理論学習(観)→活動評価(観) 本稿方法の論理



客体接近：事例評価(観)←事例研究(観)←社会経済(観) 本稿成績の論理

図-10 人間主体の社会原則に関する二つの接近の補完関係

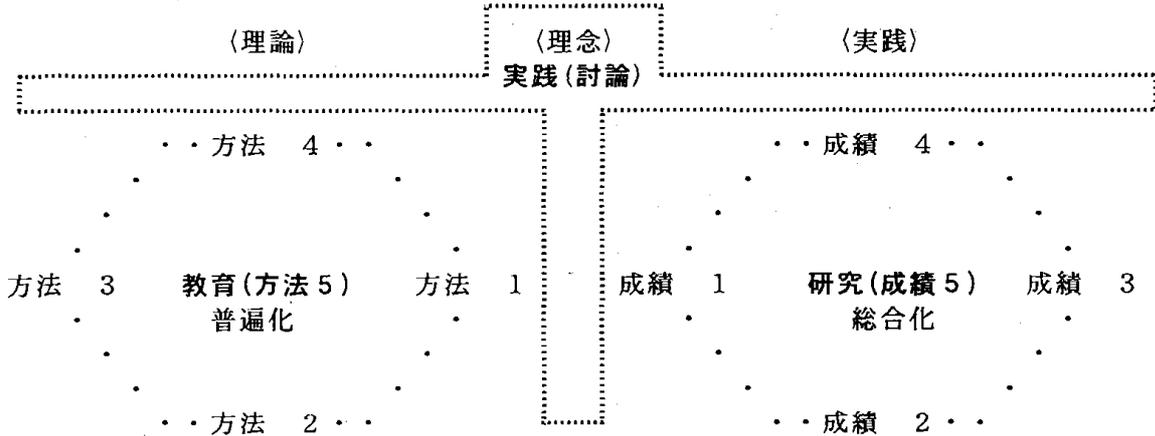


図-11 人間主体の有機体体制

究に関わる理論と方法は変化しないことが下記の説明で推察できよう。

即ち、われわれは地域ケアを素材に保健福祉、大腸がん対策⁷⁾、フィラリア対策⁸⁾、あるいは環境保全²⁾など検討しているが、その場合は図-4の内容を入れ代えるだけで健康も環境も同じ土俵で検討が可能なのである。

例えば、人間主体の環境保全を検討する場合は図-9の枠組を図-4に挿入するのである。ただし、概してこの図の下半分への関心が高いが、住民参加の環境保全を重視すれば環境教育の観点からこの図の上半分が現代的課題として浮上し、前者はその部分に落ちつく。

なお、本稿の特徴は「補完体制による三位一体」という人間活動の法則性を基盤にしていることであり、図-8の事例研究枠組は表-8のよう翻訳できる。ここで興味のあるのは現代科学の合い言葉「多様性を生かした一体化」⁹⁾がそこに内在することである。

2. 人間主体の社会原則に関わる主体接近と客体接近の補完関係 (図-10)

表-2の人間主体の社会活動の実践原則は、本稿では相補関係の二つの接近に図-10のように活用されて

いる。すなわち、方法では左から右に向けた活用、成績ではその逆方向の活用であり、両者は既述の表-3の教育/計画と研究/評価を指している。

3. 人間主体の有機体体制 (メビウスの環：西洋の知恵) (図-11)

上記の二つの接近は実践は循環関係にあるから、そのイメージを表わすには西洋の知恵メビウスの環を思い出すとよいだろう。図-11に表わした内容は人間主体の有機体体制と理解しよう。なお、この図-11の左側は教育と実践に関わる一般的理解、右側はそれを受けた組織活動の事例研究(仮説検証による質の評価)を表わしている。

4. 人間活動法則に関する総合理解 (ヤーヌス; 図-

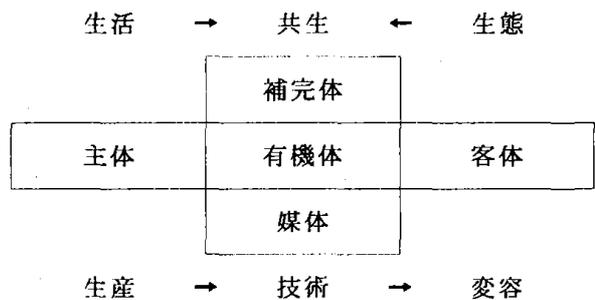


図-12 有機体の有する総合機能を捉える (ヤーヌス)

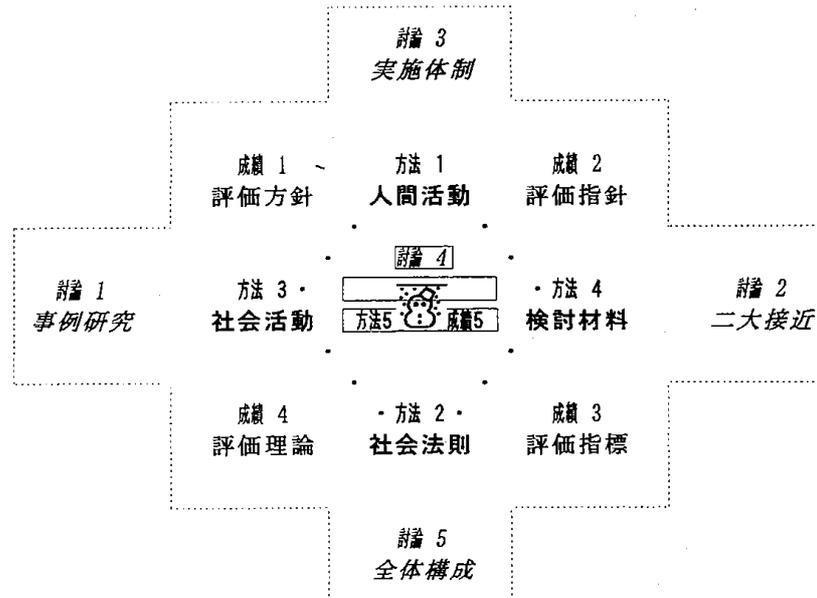


図-13 人間主体の組織活動マンダラ（有機体の構造）

13の雪ダルマの位置）(図-12)

有機体に関する基礎理解（人体解剖に相当）のためには、人間主体の組織活動に関わる意識構造（人間の中枢神経に相当、本項の内容）と実施体制（人間の社会活動／生理機能に相当、前項の内容）を社会常識を生かして合理的に理解するのがよいだろう。

本稿は有機体という総合概念のもとで補完体・主体・媒体・客体の四者構成であることを表-3（方法3）に示したことから、この有機体は図-12の総合機能があると表現できる。たとえば、従来のエイズ予防対策は図-12下部に示した主体側から客体側への一方的変容の姿勢が強かったが、最近では上部に示した主体と客体の共生を先に強調するので、縦軸の補完体や媒体を重要な支援環境と意識するようになった。なお、この場合に図-8の活動原則との関係を合わせ意識すると、二つの図式の有する全体関係を更に意識できるだろう。

換言すると、本稿で提案している有機体は「補完体による三位一体」という社会法則性を基盤に「多様性を受け入れた一体化」という現代科学の要請を兼ね備え、その許で教育／計画、実践／実施、研究／評価を三位一体に行う総合接近体系である。従って、これは人間主体の組織活動の意識構造（人間の中枢神経）でありローマの女神ヤヌスに例えるとよいだろう。

5. 人間主体の総合接近の全体構成（マンダラ：東洋の知恵）(図-13)

古来、東洋には歴史的に世界観を表す図式としてマンダラが知られており、著者等の研究でも全体の理想

像を表すときこれを用いた経験がこれまでも時々ある。

そうした経験から、本稿の方法・成績そして討論4までに関して図-13の「人間主体の組織活動マンダラ」すなわち「人間主体パラダイム」を表してみた。なお、方法5（学問媒体）と成績5（事例評価）はこの新しいパラダイムの許で補完関係をなす位置にあり、これらは図-12のヤヌスと共に真ん中の雪ダルマに位置づけることになる。

上記のよう本稿を理解すると、メビウス・ヤヌス・マンダラの三位一体の理解が必要となり、その関連で図-8の事例研究と図-9の二大接近を説明できるので、これらの事柄も「補完体制による三位一体」を表わし、正常な有機体として総合科学の全容を表すことが可能になった。これは人間性回復による「科学の正常化」を意識し、同時にその部分に従来の関連科学も模様替えして位置付けたので自己矛盾がないので、必ずしも「発想の転換」^{10),11),12),13)}を多く語る必要がなくなっていることに注目したい。

結 論

本稿で提案した有機体は「補完体による三位一体」という社会法則性を基盤に「多様性を受け入れた総合問題解決」という現代科学的な要請を兼ね備えており、その許でわれわれは教育／計画、実践／実施、研究／評価を三位一体化する総合接近体系を研究開発したので、その関連で次の四つの事柄を結論としてあげたい。

1. 人間主体の地域ケアと環境保全是共に「補完体制の三位一体」が基盤であり、これは有機体に共通す

る普遍性であり、健康問題も環境問題も住民参加の支援環境という観点から学問的に再編する意義と必要性を再確認できた。

2. 上の考えは本稿の全体にも部分にも等しく適用できたので、ケストラーの名言「全体の中に部分があり、部分の中に全体の本質がある」がまさに適合しており、この哲学的な言葉は総合問題解決に向けて人々が共通に抱く学際的な共通感覚であろう。
3. 科学に人間性を回復させるには、日常生活の発想に基づく理論と方法の活用が有効である。本稿の場合、メビウス・ヤーヌス・マンダラを三位一体に活用して、これらと事例研究枠組と活動原則に関する二つの接近と組み合わせ有機体を説明している。
4. 東洋の知恵（マンダラ）と西洋の知恵（メビウス）を総合する人間共通の知恵（ヤーヌス：図-13の雪ダルマ）が人間性回復の有効手段になることも本稿の有機体の活用で説明できた。このことから、本研究の理論と方法は人間主体を重視する全ての場面での総合問題解決に適用でき、その学際性と合理性と普遍性も関連的に確認できた。

謝 辞

本研究は平成六年度の千代田生命健康開発事業団の社会厚生事業助成金（代表：丸地信弘）の研究助成を受けた。ここに謝意を表すものである。なお、本稿の要旨はHCS公開ワークショップ（情報化社会における人間性の回復、1995年1月30日、東京）で発表した。

文 献

- 1) Koestler, A.: Janus, Hutchinson, London, 1979.
- 2) 丸地信弘・仲間秀典・藤田雅美：〈エイズと共に生きる〉時代の予防教育の展開と評価に関する研究、～人間性回復を目指す保健教育の〈支援環境〉整備への指針～、環境科学年報—信州大学—、15：1-14, 1993.
- 3) 丸地信弘、張兵、李桃、A. Fattah、張振喜、仲間秀典、魏寧、共生の時代における人間主体パラダイムの理念と理論と実際 ～健全な学問環境を科学する見る目・語る目・動かす目～、HCS公開ワークショップ配付資料、1995年1月30日・東京。
- 4) Beauchamp, T. L.: The Four-principles' Approach, in Cillon, R. ed. Principles of Medical Care Ethics, 1994 John Wiley & Son Ltd.
- 5) Kaprio, L. A.: Primary Health Care in Europe, EURO reports and studies No.14, WHO Regional Office for Europe, 1979.
- 6) 丸地信弘・魏寧・Abdul Fattah・仲間秀典：環境医学と地域保健に共存する問題解決のための新しい保健パラダイムの研究開発、～ユスリカ対策・地域がん対策・エイズ予防に共用する健康文化的提案～、環境科学年報—信州大学— 16：1-16, 1994,
- 7) 仲間秀典：地域大腸がん対策の総合評価に関する研究、未発表原稿、1995.
- 8) 砂川恵徹：沖縄・宮古群島におけるフィラリア対策活動の総合評価、～フィラリア防圧事業の経緯と成果に関する実証的検討～、未発表原稿 1994
- 9) Special Issue Unity in Didersity, Science Vol. 266:337-512, 21 October 1994.
- 10) 中嶋宏：健康と医学教育への新しいパラダイム、財団法人 医学教育振興財団、1993
- 11) 林武、里深文彦編著：科学技術の生態学、～国際化時代の生産技術の展開と労働～、アグネ承風社、東京、1993,
- 12) 米沢富美子：科学におけるパラダイム・シフト、学会報 No. 802：39-43, 1994.
- 13) N. Maruchi, N. Wei, B. Zhang, T. Lee, H. Nakama and A. Fattah; Theory and Practice on "Living Together" Studies with particular to Human Centered Paradigm, ～a humanized research for common probelm solvings by means of promotive health～, Gill, K. S. Ed. Proccedings-New Visions Conference/ERASMUS Workshop, Brighton, July 1994, in print, Springer-Verlag, London, 1995
- 14) 丸地信弘：「エイズと共に生きる」時代の予防教育、～21世紀の保健教育に生かすための提案～丸地信弘・仲間秀典編集 二十一世紀の地域医療～地域ケアを見る目・語る目・動かす目～、25-39, 信毎出版局・長野 1993.
- 15) 丸地信弘：地域医療的にみた AIDS と MRSA の類似性、～同質性から異質性を捉え直す発想の転換の現代的意義～、日本医事新報ジュニア版 No.333, p32-33, 1994,
- 16) Maruchi, N.: An Introduction to New Health Paradigm with particular to "Living with AIDS", 70p, Third Edition, Shinshu University School of Medicine, Japan, June 1993.

(受付 1995年2月2日)